

【千葉】行政と連携して町づくりも視野に活動「将来は海外でも貢献を」-森徳郎・大多和医院院長に聞く◆Vol.3

2023年4月28日（金）配信 m3.com地域版

創業108年を迎える「大多和医院」（長生郡白子町）を2021年に承継し、町で初となる在宅医療を始めたほか、地域に向けたイベントも開く森徳郎院長。現在は行政とも連携し、町づくりを視野に活動を企画する。なぜこんな動きを？と聞くと、背景には「自分の腕の中で温もりを失っていった子」との思い出、そして、それに連なる「北極星のように遠くにあるビジョン」があった。（2023年3月10日オンラインインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら



森徳郎氏と同院のセラピー犬「スプートニク」（クリニック提供）

——大多和医院は2022年から地域に向けた活動も行っています。着想の経緯は。

過去の海外活動（詳細はVol.1を参照）から、漠然と「そんなこともしたいな」と考えていました。具体化のきっかけは、新型コロナワクチン3回目の集団接種を当院で行ったことです。

町の事前の見立てでは、接種対象者全てをカバーするのは難しいとのことでした。町には公的な医療機関がないため民間のクリニックに頼る必要があり、受け皿が足りないというのが理由です。それならば、と当院が敷地の広さを生かして集団接種ができる会場を用意しようと考えました。クリニックでチームをつくって町と協力し、2022年2月から4月までの毎週日曜日に行いました。以後もクリニックでのワクチン接種は継続し、2023年2月までに8128人が接種しました。



2022年に行った新型コロナワクチン集団接種の会場（クリニック提供）

——プレスリリースによると、森先生は2022年9月に白子町振興審議会の委員に就任し、2023年2月には町と連携協定を結びました。

町で初となる在宅医療の実施や新型コロナ対応など、これまでの取り組みを評価していただいたようです。集団接種のころから町の職員と話すようになったのですが、彼ら彼女らの中には、私たちと同じように「町を良くしたい」思いのある人たちがいるんですね。石井和芳町長とも後でお会いしてときどき話す仲になりましたが、2021年に就任したこともあって町を変革したい意欲が伝わってきました。

振興審議会のメンバーに就任したことは、町づくりの視点を持つうえでとても有効でした。これは町の方向性を示す総合計画を策定する会議体で、その場ではさまざまな町のデータが示され、町の状況や課題を俯瞰して見ることができます。石井町長や町職員との話し合いやデータも踏まえ、地域に向けた活動を行っています。



連携協定を結んだ森氏と石井町長（クリニック提供）

——なるほど、活動には子どもを対象にしたものが多い印象を受けましたが（詳細はVol.1を参照）、こんな背景があると。

白子町も多くの地方自治体と同様、人口が減っています。2000年前後には約1万3000人いましたが、これをピークに減少傾向が続いており、2023年3月1日現在は約2400人減の1万640人です。子どもを増やさない町機能を維持できなくなる可能性が高まるので、子育てのしやすさや子どもの教育環境はとりわけ重要だと考えています。

当院は自己資金を使ってアイデアを実行に移しやすいですが、町民の税金が原資となる行政は議会に通すなど各種手順が必要になります。なので、「これは町づくりに貢献するかもしれない」と考えたものをまずは当院が小さく始めて、成果や効果が出ればその情報を町に提供する。町が「良い」と判断したものを応用・規模拡大するなどしてやってくれば、といった思いもあります。

——医療以外の業種や行政とフラットに交流し、それが形になってきている印象を受けます。多様なつながりが生まれているわけは。

「自分が医師としてどれだけ特別扱いされてきたか」実感した経験が大きいのではないのでしょうか。私が海外医療支援を行う「ジャパンハート」に在籍していたころ、上司がMRだった時期があったんですね。最初のころはもう、その人からめっちゃめっちゃダメ出しされるわけです（笑い）。「ハウレンソウ（報連相）ができていない」「メールマネーができていない。情報共有できるようちゃんとCCをつけてください」とか。上司には年下の人もいました。

医師の立場であれば言われたいだろうことを言われ、肩書を外したときの自分がいかにダメなのか思い知りました。「俺はこの程度なんだ……」と落ち込むこともありましたが、その一方で対等な関係性を体感でき、うれしく思っている自分もいました。「できていないのに、さもできているかのように扱われてしまう」のは、もしかしたらプライベートでも同じかもしれない、そうだとしたら格好悪いな、とも思いました。

——「MRが上司」というのは、医師としては珍しい経験ですね。

私は2020年の帰国後、ジャパンハートの顧問に就任して現場での活動はやめ、2021年9月に大多和医院を承継するまでに東京で起業しました。医療以外の分野でビジネスを試みたためですが、ジャパンハートとこの起業家としての時代は外部の人と話すとき、自分が医師だとは伝えませんでした。名刺にも記載しませんでした。

すると、「医師」というバイアスがなくなったためか、相手が話してくれる内容の幅が広がって面白かったですよね。今は医師であることを開示したうえでのお話も楽しめるようになりましたが、自分の肩書を外してみた経験が今のコミュニケーションに生きています。

——そんなふうにコミュニケーションを意識するとして、実際に医療以外の業種とどう出会い、交流を深めているのですか。

白子町に来てもらい、友人として交流してから仕事を一緒にすることが多いです。当院はもともと、有床診療所だったので、敷地だけでなく院内も広いんです。私はクリニックに住んでおり、元当直室の自室だけでなく病室も改装してベッドや机などを置き、ゲストルームにしています。週末になるといろいろな人がクリニックに来て食事やお酒を共にし、語り合っています。中にはゲストルームに泊まる人もいます。

——病院やクリニックのそばに自宅を構えるケースは聞きますが、院内に住んでいるのは時代的にも珍しいと思います。最後に、起業や事業承継を経てなお、「海外でも何か貢献を」と思い続けているのは。

人生において何を重視するか、ではないのでしょうか。自分がお金だけで満たされるのであれば、開業医になればそれなりに実現できると思います。でも、私はそれだけでは満足できなかったですし、研究に没頭する方でもない。

海外で活動していたときは毎日のように重い病の子どもが訪れました。中には事故にあい、私の腕の中で温もりを失っていく子もいました。「世の中の仕組みとして仕方ない」。そうロジックとしては捉えられるかもしれませんが、個人的にはどうしても海外の子の死が理不尽に思え、受け入れられなかった。

北極星のように遠いビジョンかもしれませんが、でも、世の中を少しでも良くしていきたい。私一人ではできないので、有志でチームをつくって力を合わせ、一つ一つ自分たちのできることをしていきたい。その序章として、今があると考えています。

◆森 徳郎（もり・とくろう）氏

2010年北里大学医学部卒。横須賀市立うわまち病院での勤務後、2017年に東南アジアで医療支援などを行う認定NPO法人「ジャパンハート」に加入。海外で診療や病院マネジメント、医療事業統括を担い、2021年に千葉県長生郡白子町にある「大多和医院」を承継。日本内科学会総合内科専門医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

